

『秘恋は甘い毒のように』

著:水月真兎

ill:明神 翼

「ゆっくりおやすみになれましたか？」

階段を下りてくる霧人に気づいて、先に声をかけてきたのは、マスターのほうだった。

「ああ。ありがとう」

いまだに人見知りしてしまう霧人は、ゆうべ会ったばかりの彼にひどくよそよそしく返事をした。

村雨から、歳は三十六だと聞かされたけれど、外見は二十代と言われても十分通用しそうなほど若く見える。

端正な細面で、物腰のやわらかそうな男だった。

あまり治安もよくない歓楽街にある酒場には不似合いなほど、やさしげできれいな顔は、きっと村雨の好みなのだろう。

彼が村雨の使っている情報屋の一人だと紹介されたけれど、霧人の目にはとてもそれだけの関係には見えなかった。

多分、会議室で村雨に抱かれた時、彼がこっそり電話していた相手が、このマスターだったのだろう。あの時も、村雨のやけに親しそうな口調が気になっていた。

昨夜、初めて紹介された時と同じようにチクリと胸が疼いて、そんな自分が堪らなく厭わしく思ってしまう。

「飲むか？」

村雨は、霧人の複雑な感情など知るよしもない呑気な顔で、手にしたグラスを軽く掲げて誘ってきた。

「まだ勤務時間だ」

「ここには文句言う奴なんか誰もいねーよ」

冷やかに拒絶した霧人に、村雨は不満そうに反論してくる。

「そういう問題じゃないだろう」

刑事の仕事は、いったん事件の捜査に入ってしまうえば勤務時間などあってないようなものだったけれど、昨日、いきなり村雨と組まされてからの行動は、霧人自身に非はなくても後ろめたさが常につきまとうものだった。

もっとも、上が村雨を選んだのは、霧人の監視と六星会への捜査の妨害が目的だろうから、二人でホテルに入ろうが、爛れたセックスに耽ろうが、むしろ狙いどおりと言うべきだったのかもしれない。

気まずさのせいで、いっそう無愛想さを増した霧人の態度に、村雨は苦笑しながら、カウンター越しのマスターと顔を見合わせた。

「な、こういう男だ」

「村雨には、ちょうどいいと思うよ」

頑なな霧人の言動は、彼にとってもあまり気持ちのいいものではなかっただろうが、人当たりのいいマスターは楽しそうにクスクス笑っている。

「ぬかせっ……」

奇妙に甘く感じるその笑い声に、村雨は面白くなさそうに舌打ちした。

「あの……神山さんの飯です」

待っていたように奥にある小さな厨房から顔を出した慎一が、トレーに載せた朝食兼昼食をカウンターまで運んできて、村雨の隣の席に置いた。

「慎一、倉庫から空のビールケースを運んでおいてくれ」

「はい、マスター」

そのやり取りを聞いていると、まるでずっと前からこの店で働いていたのかと錯覚しそうなほど、慣れた様子だった。

慎一のほうも、とても昨日までヤクザだったとは思えない素直な性格だけれど、むしろ、このきれいでやさしげなマスターに頼まれると、なぜかおとなしく従ってしまうらしい。

慎一どころか、霧人には好き放題に振るまってきた村雨すら、彼の前ではどこか遠慮がちだった。

「悪いな。迷惑かける」

「村雨が謝るなんて、雨でも降りそうだな。別に迷惑じゃないよ。ちょうど、前のバイトがやめて人手不足だったところだ。僕も助かってる」

穏やかに微笑んで村雨を見つめる男と、口を開けば恨み言しか言えない自分とを、霧人はつい比べてしまい、また重苦しく胸を塞がれる。

「六星会のこと……」

「ああ、わかってる。気をつけておくから」

慎一を厄介払いした村雨も、一応、六星会のことには気になっているのか、心配そうなまなざしを向ける。

かえって、危険な立場の慎一を預かっているマスターのほうが、少しも六星会を恐れる様子のないことが、霧人には不可解だった。

(情報屋なんてやっていれば、暴力沙汰も慣れっこになるのか……?)

でも、細身の霧人よりも、いっそう小柄に見える彼が、ヤクザ相手に立ちまわりしている姿など想像もつかなかった。

「食えよ」

ずいぶん親しげなマスターと村雨の会話に、無意識に耳を澄ませていた霧人は、振り返った村雨に促されて、隣のスツールに座った。

しかし、なんとなく自分がここにいることが場違いな気がして、空腹のはずなのに食が進まなかった。

昨日一日、村雨に連れまわされて、ろくに食事もしていないし、体力も消耗している。食べなければ体が保(も)たないことは、わかっていたけれど。

「パンのほうがよくあったかな？」

「いいえ……」

霧人の手が止まりがちなのを気にしたのか、カウンターの向こうから澄んだまなざしが覗き込んでくる。

ご飯に大根の味噌汁と焼き魚。卵焼き。小鉢の煮物。きちんとした日本食の朝食など、食べるのは久しぶりだった。

「食べさせてやろうか」

「冗談を……っ」

もたもたしている霧人を、村雨はわざとらしくからかってくる。

この男の前で、自分と親密そうなところなど見せてもいいのかと、霧人のほうがドギマギして、耳まで赤くなっていく。

霧人との関係を、もしも意図的に彼に見せつけているのだとしたら、やはりこの男は村雨の情(じょう)人(じん)なのではないかと、よけい疑いが深まった。

「いじめるなよ。ほんと、村雨は人が悪いな」

二人の間で、居たたまれずに俯いてしまった霧人を庇(かば)うように、マスターはやんわりと村雨をたしなめてくれる。

「こいつが相棒じゃ大変でしょう。遠慮なくこき使ってやってくださいね」

「え……？」

ニッコリ微笑みかけてくるマスターに、まさかその相棒から脅されてセックスしているなどと言えるわけもなく、霧人は返事に窮した。

でも、この男も繊細そうな見かけとは裏腹に、したたかな村雨を上手く手玉に取っているようにも見える。

情報屋だというし、ただのバーの経営者とも思えず、いったい何者で、村雨とはどういう知り合いなのか、ますます気になった。

「よけいなことを言うなよ。それでなくとも、こいつには苦勞させられてるんだ」

口を挟んできた村雨の横柄な言いざまには、霧人はムツとして、人を脅迫して振りまわしているのはどっちだと、思わず恨みのこもったまなざしを向けていた。

「村雨は少しぐらい仕事で苦勞したほうがいいんだよ。いつものらりくらしと遊んでるんだから……」

「放っとけ……」

やんわりとした口調のマスターにそう決めつけられると、村雨は反論もできずに、拗(す)ねた顔を見せる。

(やっぱり……この人は……)

村雨が特別扱いする相手。からんでいるように見えても、霧人の場合とは明らかに違う。おそらく、彼にとってとても大切な存在なのだと気づいてしまった。

やはり食欲がなくて、結局、朝食は半分ほど残していた。

村雨とマスターのひどく睦まじそうな関係よりも、そのことにショックを受けている自分自身に滅入りそうだった。

本文 p130～136 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>